第五講「分析」から「総合」へ

次の文章は、山崎正和が二〇一一年に刊行した『世界文明史の試み』の序章の一節である（一部省略した箇所がある）。これを読んで、あとの問いに答えよ。

何ごとであれ目に見える存在には様式というものがあるが、当然、現代の健康にも、健全な身体のあり方にも一定の様式がある。どんな身体が健康であるか、どんな身体の容姿と機能が理想的であるか。それについていま、一つの価値観が世界を覆いつつあるといえる。

きわめて大ざっぱにいえば、現代の身体の理想像には古典ギリシャ彫刻の様式が復活したといえそうである。容姿に関しては、ほぼ七頭身か八頭身の頭身比例が好まれ、女性ならくびれた腰と豊かな乳房、男性なら高い身長と筋肉質の胸や四肢が喜ばれる。顔については「［　A　］眸皓歯（ぼうこうし）」が男女ともに好まれ、この理想像は映画やテレビや広告写真などに載って、人種と民族を問わず受容されている。もちろん髪型や化粧の細部はめまぐるしく変化するが、この変化も服飾の流行と同様、ほとんど瞬時に世界各

国に伝播している。

かつて民族ごとにあった特殊な身体風俗、顔を含む全身の刺青（いれずみ）や首の延伸、耳朶（じだ）や唇に円盤を嵌（は）めこむ変形手術、中国全土に見られた纏足（てんそく）などの身体矯正の伝統は消滅した。日本でもお歯黒や「富士額（ふじびたい）」の美意識は忘れられたし、履き物の変化とともに女性の歩き方の規範も大きく変わることになった。西洋におけるコルセットの廃止、入浴の頻度のいちじるしい増大なども、そうした身体文明の世界的統一の一例に数えられるだろう。

だが身体についてより重要なのは、容姿よりも運動能力であるのはいうまでもない。身体はその筋肉と骨格の構造から、つねに動こうと身構え、格別の目的がなくてもたえず小さく動いている存在である。そして逆に身体は動くことによって形成され、動きの様式によって容姿と形態を決定されている。ホモ・サピエンスはもともと二足歩行の可能な身体構造を備えているが、その構造は幼児期に教育を受けたうえ、現に歩くことによって初めて完成され、一生を通じて歩き続けることによって強化されているのである。

その意味で身体のあり方と運動の様式はほぼ同義語なのであるが、この様式が十九、二十世紀を通じて世界的に標準化されてきたのは明らかだろう。もっとも身体運動の標準化は、十九世紀段階ではおもに生産労働の規

格化を通じておこなわれた。機械生産が普及したうえ、農業や土木工事のような作業も近代化され、それに応じて労働の仕方も世界共通の様式を持ち始めた。もちろん職人仕事、家事労働といった分野ではまだ伝統の違いが残っているが、大企業の事務や製造や販売の現場など、文明の中心を占める労働の分野では国際化が進んだ。早い話が、算盤（そろばん）や鋸（のこぎり）の使い方には地域による差違があるが、電卓や電動鋸の操作法にはもはやそんなものはないのである。

そういえば、かつて農耕民族は二拍子の運動を好み、狩猟民族は三拍子を喜ぶといった文明論が語られることもあった。それ自体の真偽はともかく、いずれにせよそうした文明を分かつような大きな運動様式の対立は消えていった。日本人の歩き方を例に見ても、女性の内股歩きは消滅し、右手と右足を同時に前に出す「なんば」と呼ばれる伝統的な様式も、いまでは相撲と歌舞伎という特殊な分野にしか残っていない。

しかしここで忘れてはならないのは、人間の身体運動はそもそも、そうした生産や実用の世界に限られていないということだろう。[1]身体運動は身体の構造のなかにつねに秘められているものである。外界に働きかけるだけではなく、身体が身体であるために、身体が存続するためにたえず機能しているものなのである。

身体はしばしば、倦怠（けんたい）感や所在なさを解消するためだけにも動く。みずからを癒し、みずからを粧い、みずからを強めるためだけにも動く。何よりもみずからの存在を感じ、それを鋭く意識するために動く。身体はみずからがあることを確かめ、その存在感を味わうためにも運動するのである。要するに生産的、実用的な身体運動が「する」身体の営みだとすれば、ここにはもう一つ別の運動があって、それは「ある」身体の自己確認の営みだといえるだろう。

そしてとりわけ二十世紀に顕著なことは、世界的な統一の趨勢（すうせい）が、この身体の自己確認のための運動の様式にまでおよんだことであった。非生産的、非実用的な行動の様式が、にわかに文明の境を超え始めたのである。

まずいわゆる文化交流の進展に伴って、日常生活の礼儀作法の共通理解が深まった。西洋風のテーブル・マナーと食器が東漸したのにたいして、やや遅れて箸（はし）の使い方を西洋人が学ぶようになった。椅子とベッドの生活が日本の家庭に浸透したころ、アメリカの居間ではラグを床に敷いて座ってくつろぐ姿がめだち始めた。握手、抱擁、お辞儀、接吻といった挨拶の様式も、若い世代では異文明のあいだで共通の意味を持つことになった。異質性は宗教儀式とそれにまつわるタブーの領域に限られ、世俗的な祭典というべき交歓の様式は世界のどこでもあい似ている。とくに若者の舞踊

や音楽、パーティーやイベントに集まって楽しむ騒ぎ方には、東西南北の違いはほとんどなくなったといえるだろう。

　だがそれ以上に重要なのは、二十世紀におけるスポーツの地球規模の普及であった。一つには野球やテニスやサッカーなど商業スポーツの影響、もう一つには一八九六年に始まったオリンピックの寄与が大きかった。

　ここで注意しておくべきことは、スポーツが一見、「する」身体の行動であるように見えながら、じつは典型的な「ある」身体の行動だという事実である。たしかに速く走ることも、高く跳ぶことも、ボールを投げたり蹴ったりすることも、一応は身体が外界に関わる行動の一種だろう。だがそのさいスポーツが関わる外界はいわば虚構の外界であって、産業労働や家事労働が関わるような真の現実ではない。スポーツの外界は、真の現実がつねに持つ偶然性を極限まで免除され、現実行動にとっては避けがたい、いわゆる［　B　］からも解放されているからである。

　たとえば一〇〇メートル競走の場合、走る路面は完全に平坦（へいたん）に整備され、ランナーは風を除くいっさいの［　C　］に配慮する必要はない。これが現実の疾走なら、走者は路面の状況から交通渋滞、風雨から自分の服装にいたるまで、おびただしい［　C　］の心配にわずらわされて走らなければなるまい。ついでにいえば、スポーツでは競技者は目的も方法も厳密に

与えられていて、目的にとって最適の方法をみずから選択するというわずらいも持たない。現実の走者はあまたある移動手段の比較考量を迫られるのにたいして、一〇〇メートル走者はただ足で走ればよいのである。

さらにスポーツが選手に与える行動の目的は、スポーツそのものが決めたルールがあるだけで、それ以上の広い現実の要求によるものではない。マラソンが四二・一九五キロメートル走るのは［D］なルールにすぎず、真の現実のなかで合理的な意味は持たない。裏返していえば、マラソンの完走はそれだけで［E］を持つのであって、より上位の意味を持つ目的の手段となって奉仕することはないのである。現実の人生において、すべての行動の目的がその次の目的の手段となる関係にあって、目的が無限の連鎖をつくっているのに比べて何という違いであろう。

こう考えると、スポーツの本質はやはり舞踊や化粧や礼儀作法に似ていて、自己の「ある」身体を一定の様式によって確認する方法だと理解できる。それは何かを「する」ことによって外界に関わる行動ではなく、［F］、いいかえれば「私である」身体に関わって、その存在感を確認して楽しむ営みだといえる。各種のスポーツのジャンルとそれぞれのルールは、その自己確認のための様式であって、また反対に、それに従うことによって身体そのものも存在様式を獲得することができるのである。

（山崎正和「世界文明史の試み──神話と舞踊──」）

問一　空欄［A］に漢字一字を入れると容貌に関する四字熟語が完成する。その漢字を解答欄（記述解答用紙）に記せ。

問二　傍線部１「身体運動は身体の構造のなかにつねに秘められているものである」の意味として最も適当なものを、次のイ〜ホの中から一つ選び、解答用紙に答えよ。

イ　身体運動は私たちがあえて何かをしようとするときだけではなく、筋肉や骨格の構造という私たちの身体のしくみにしたがって、つねにその内部でもおこなわれている。

ロ　身体運動は生産的、実用的に発揮されるだけではなく、つねにそれと平行して私的、非実用的な形でも遂行されるように身体のなかで準備されている。

ハ　身体運動はおもてにあらわれるその形に本質があるというよりは、身体の構造のなかに隠されたその状態に本来の姿がある。

ニ　身体運動はその場で全面的に発揮されるものではなく、身体構造のなかにつねになにがしかは残ったままになっている。

ホ　身体運動は外界に向けておこなわれるだけではなく、じつは身体の構造を通じて精神の深部にも作用する。

問三　空欄［B］に入る最も適当な語句を、次のイ〜ホの中から一つ選び、解答用紙に答えよ。

イ　選択の自由　　ロ　方法の必然　　ハ　理想の実現　　ニ　目的の連鎖　　ホ　虚構の必要

問四　空欄［C］（二箇所ある）に入る漢字三字の語句を文中から抜き出し、解答欄（記述解答用紙）に記せ。

問五　空欄［D］・［E］に入る語句として最も適当なものを、それぞれ次のイ～ホの中から一つ選び、解答用紙に答えよ。

D　イ　空間的　　ロ　主観的　　ハ　自然的　　ニ　人間的　　ホ　恣意的

E　イ　開かれた意味　　ロ　現実的な意味　　ハ　合理的な意味　　ニ　完結した意味　　ホ　理想的な意味

問六　空欄［F］に入る最も適当なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、解答用紙に答えよ。

イ　行動するだけで価値のある身体　　ロ　存在するだけで価値のある身体

ハ　行動するだけでは価値のない身体　　ニ　存在するだけでは価値のない身体

ホ　存在と行動の完全に一致する身体

問七　問題文の趣旨と一致するものを、次のイ～ホの中から二つ選び、解答用紙に答えよ。

イ　身体のあり方と運動の様式が地球規模で標準化したにもかかわらず、「する」身体と「ある」身体という観点に立つと、スポーツによる身体の自己確認に関して興味深い事実が指摘される。

ロ　身体運動の標準化は十九世紀以来まず「する」身体において進行したが、「ある」身体は基本的に非生産的、非実用的なものであるためにその標準化はなかなか思うように進んでいない。

ハ　身体のあり方と運動の様式について一つの価値観が世界を覆いつつあるが、しかし「する」身体と「ある」身体という観点に立つと、後者に対する前者の優位が特にスポーツの普及を通じて明らかに認められる。

ニ　「私である」身体の存在感を確認して楽しむ営みであるという点において、スポーツは舞踊や化粧や礼儀作法に似ていて、偶然性を排し、繰りかえしの要素を含みつつ、しかしその度ごとの発見や成功、そして喜びを伴うものである。

ホ　健康な身体についての同じ価値観が世界を覆いつつある今日、ますます商業化の進んでいくスポーツは何らかの宗教的な意味を見いだして異質化を図らない限り、「する」身体と「ある」身体の区別に関係なく存在意義を失う瀬戸際にある。

問八　問題文の趣旨に即して、「する」身体と「ある」身体とのあいだに見いだされる違いを、三十字以上四十字以内で解答欄（記述解答用紙）に記せ。その際、次の条件にしたがうこと。

一　キーワードとして「画一性」「個別性」という語句を文中に用いること（ただし、カギカッコをつけなくてよい）。

二　句読点や符号なども字数に数えること。

三　文頭の一マス目を空けないこと。

（次ページより解答欄）

問一

眸皓歯

問二

問三

問四

問五

D

E

問六

問七

問八

30

第五講　「分析」から「総合」へ　解答

問一　明
眸皓歯

問二　ロ

問三　ニ

問四　偶然性

問五　D　ホ　E　ニ

問六　ロ

問七

イ

ニ

問八

「する」身体は画一性しかないのに対し「ある」身体はそれに加え個別性も確認できる。